

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第135回

経験美学とその周縁：詩の受容経験・脳内映像形成との関係から

「神経系人文学と経験美学」における「基調講演：美学，経験美学，イメージ学の邂逅」を聴いて*01

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学教授，放送大学客員教授)

受苦の韻文化

経験美学Empirische Ästhetikの唱道者Winfried Menninghausが主導した実験によると，詩的感動は，喜びや幸福感よりも，むしろ反対に悲哀や苦痛を読者に与えた場合，とりわけ顕著な心身的効果が，数値的な生理学的反応となって計測されたという*02。それならば断頭台の露decapitationといった話題が最適な詩的感興，となるのだろうか。これは美術史家Frank Fehlenbachのいささか辛辣な観察だが，bitter-sweetness典型の「お涙頂戴」となれば，夏目漱石も『倫敦塔』で触れたPaul Delaroche, 《The Execution of Lady Jane Grey》(1833, London, National Gallery) ■01 など脳裏に浮かぶ。

さらに，なるほどと思い起こされる詩句がある。

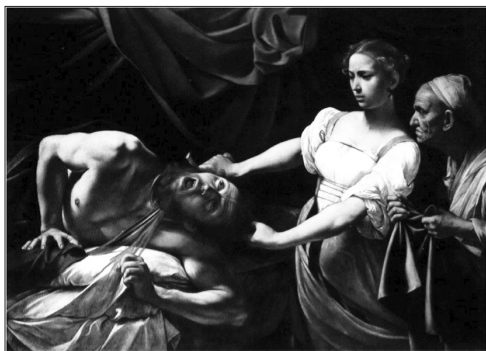
The iron hand crush'd the tyrant's head, and became a tyrant in his stead
暴君の首をはねた鉄腕が結局は次の世代の暴君に成り代わった，というわけだ。同様の話題は新約聖書にもみえ，第一次世界大戦の折にセイロン出身の学究，

Ananda K. Coomaraswamyも引いているが，探索は読者にお任せしよう*03。ここでの典拠はWilliam Blakeのthe Gray Monk。内容としては生首が飛ぶという苦痛に満ちた陰惨な光景だが，軽妙な脚韻が詩的朗誦のうえでは快感を与える。うまい文脈を添えてこれを引用すると，聴衆の笑いを取ることも難しくない。これは筆者が何度か実地に「実験」して確かめた「事実」だが，今回の会合では，なぜか功を奏しなかった。とまれ否定的な感情が冷笑的な韻律に乗せられ，結果として笑いをすら誘発する事例としては，心理実験の成果を見事に裏書きする。まことにメニングハウスも論証したとおり，「悪は善よりも剛し」なのである■02,03。

滑稽さの詩的効果の裏には，苦痛をもなった実体験が隠され，それが昇華されて脚韻を踏む場合もある。諺（ことわざ）なども，だからこそ定着し，人口に膾炙する。一例として岡倉覚三に登場願おう。日本近代において英語表現を通じて東洋の美学を喧伝した天心先生には，日本で教育を受けた大学受験生ならば誰しも一度は耳にした逸話がある。初めて北米サ



■01 ポール・ドラロッシュ 《レイディ・ジェイン・グレイの処刑》1833 ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵



■02 カラヴァッジョ 《ホロフェルネスの首を斬るユディト》
C.1595-6 ローマ／国立古典絵画館蔵



■03 ギュスターヴ・モロー 《オルフェウスの
首を運ぶトラキアの娘》（部分）1866モロー美術館蔵

ンフランシスコに上陸した覚三は、土地の若者から不意にwhich nees are you, Chinese or Japanese?と尋ねられる。この不作法に対して覚三は即妙にこう返した、というのだ。Which kees are you, Donkey, Monkey or Yankee? よく知られた話なので、これも出典は省略するが

(論文にすべて出典をつけろ、という強迫症の問題点も、以下に論点とする) *04、なぜ覚三の口をついてdonkeyとmonkeyが登場したのか、きちんと説明した話は耳にしない。

これは稲賀の私説だが、おそらくそこには、初期の日本学者として著名だったBasil Hall Chamberlainが*Things Japanese*に書いた日本詩歌に対する評釈があったはずだ。チェンバレン先生はそこで、日本の俳諧ではやれ、蛙が水に飛び込んで音がした、などという珍妙な句が名句とされているが、蛙とか驢馬とか猿とかいった滑稽な被造物は西洋の詩ではおおよそお招きではない、と苦言を垂れている。

「猿」とは「古池」と同じ芭蕉の「猿蓑」monkey's coatでもあろうか。おそらくこの博言学者の日本詩歌への揶揄が、若い覚三の脳裏には屈辱として刻まれ、それが同じような「黄色」の東洋人種に対する軽蔑への反応として、咄嗟に脚韻を踏んだ詩句となって爆発した。それが、例の地口だったのではないか *05。

だが詩句は一般に複数言語をわたるには不利な条件を抱えている。脚韻といった音素上の韻律が翻訳に耐えないからだ。これも日本語読者ならよく知る詩人、谷川俊太郎に「かっぱ」の詩がある。Kappa kapparatta, Kappa lappa kapparattaで始まる滑稽詩で、まだまだ増幅して続く。アルファベット表記なら発音だけで楽しめるが、いかんせん、日本語を解さない

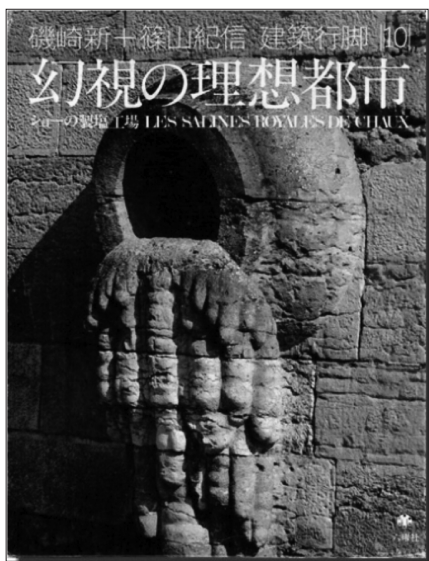
読者には、意味は皆目見当がつかない。意味を拾っただけの翻訳では、原詩の効果の大半は喪失されてしまう。たしかに中国の詩人、田漢には卓抜な漢語音訳が知られる。だが一般には音韻の効果を犠牲にしても教訓が伝わるような詩しか、多言語を横断する翻訳には耐えない *06。一例として中納言兼輔 (877-933) の和歌を、これもalphabetで引いてみよう。

*Mikanohara wakite nagaruru Izumigawa
itsumiki toteka kohishikaruran*

この和歌については、小田部胤久氏の師匠であった今道友信に英文による卓抜な読解があったかと記憶する。Izumigawaとは奈良の河川の名称だが、泉は源泉でもあり、また水の流れは、ニコラ・ルドウーの幻視の建築案■04を想起するまでもなく女性の秘処の比喩でもある。そのIzumigawaの韻律が記憶を引き出し、itsumikitotekaへと変貌する。あの邂逅、逢う瀬はいつのことだったのか、と水の流れからの連想が詩人を回想へと誘う。苦くも甘いSeensuchtあるいはHeimatwehすなわちnostalgiaが、『新古今集』に収められた日本の古い詩歌に留められていた。その証拠を西洋の読者に伝えるには、まことに模範的な作品だろう。筆者自身、今道先生の見事な評釈を聴いて鳥肌goose bumpが立ったことを、今に覚えている。生理的な苦痛あるいは悪寒chillに近い感覚は、こうして記憶に深く刻まれる。

幼少体験の昇華と共同体の幻想

これらの例を取り上げたのには、二つの理由がある。ひとつは、詩を記憶し、暗記した日の記憶がいかに想起されるか、の問いだろう。大きな事件があった日に自分はどこで何をしていたのか、ふいに



■04 『幻視の理想都市 ショーの製塩工場』（磯崎新+篠山紀信『建築行脚』10）表紙 1980

ありありと記憶が蘇る。それに近い経験を、時に詩は齎してくれる。これを経験美学 empirical aesthetics と呼ばずして、何であろうか。科学実験的手法はこうした長期的記憶の再来について、いかなる知見を齎すのか。他方で、こうして詩句に結晶化された体験は世代を超えて伝承される。かつての教育で推奨された詩の暗唱はいまでは廃れてしまった。だが思春期までに記憶に刻まれた詩句あるいは楽曲は生涯拭い去ることができず、なにかの拍子に無意識的に回帰し、あるいは耳朶から離れようとしなない。そして初めてその歌詞に接した日の情景がまざまざと脳裏に蘇る——切ない喪失感を伴いながら。

詩歌の体験はこのようにして個人を共同体へと誘い、そこに「文字の共和国」republic des lettresを基礎づける。日本でいえば皇室の歌会始はその制度化であろうし、百人一首を暗唱できる言語共同

体は、それらの詩句を共通の財産あるいは遺産として活用できる。オーギュスト・コントも述べたとおり、言語というのは皆で分配しても各人の取り分が値減りすることはない、という特異な特性を帯びた財産なのだから。国語辞書を法典trésorと見做す価値観がフランス共和国などには顕著だが、となるとこうした共有財産をどのようにして計量的実験によって観察するのか、という学術的課題がもちあがる。共有財産に一々出典を付すなど、野暮である以上に、倒錯的な蛮行といわねばなるまい。出典明記の強制は、こうした世代を跨ぎ越した共有財産の喪失と表裏一体であり、個人的所有権の絶対視は共同体の崩壊の予兆でもあれば、破壊の制度化ですらあるのだから。

閼域と盲点と

頭蓋骨はdecapitatedつまり断頭台で切断される苦痛と裏腹に、その記憶を共同体の次世代へと継承する。この切断と継承の遊戯、喪失と再生の表裏——それは岡本和子氏がWalter Benjaminの語る反復や永劫回帰のなかに見出したものでもあれば、森本庸介氏が、Unica Zurnの『暗い春』に基づくCathrine Binetの映画『ドリッゲン・ド・グラーツ伯爵夫人の戯れ』（1980）■05で取り上げ、愛人の写真を口に含んで咀嚼するというiconophasieについて考察を巡らせた問題でもある。

そこに3つほどの補助線を引いてみたい。ひとつはバリのガムラン演奏を巡る話題である。ガムラン演奏に加わると、頭脳からは盛んにα波が検出される。仏教寺院での僧侶たちの読経に加わったり、西洋の教会や修道院で修道士たちの聖歌の合唱に参入したりする場合にも、類似し

た体験が得られるだろう。いかなる環境と共同体体験が、瞑想に特有の心身状況を齎すのか。さまざまに異なる調律を施した金属の打楽器群からなるガムランの場合、可聴領域のほかに高周波の超音波に属する波長領域も多く含んだ音波が発生する。京都大学の実験班の報告によれば、そのうち可聴域のみを被験者に聞かせても、顕著なα波の発生は認められなかった。ところが他方、可聴領域を超えた超音波部分だけの聴取でも、脳は賦活されない。なぜか両者を同時に聴取することが、瞑想状態を惹起させるには必要だ、との結論が導かれたが、現時点ではその理由付けはできていない*07。Un je ne sais quoiがここに潜む。

ただここから幾つかの教訓を引き出すことはできよう。ひとつには実験環境と被験者との関係設定、「感官の閾値」（小田部胤久）の問題である。現在の市販の多くのCDなどでは、非可聴域は無駄という判断で、人間の可聴域しか拾われていない。リラックスのためのCDなども販売

されているが、はたしてそれらは可聴域だけの録音で所期の目的をはたしているのだろうか。イヌなどは人間には聞こえない超音波に反応するが、人間の可聴域だけを調査対象にしたのでは、イヌの聴覚経験を追体験することは、最初から不可能となる。反対に低周波も無視できない。往年の真空管音響再生装置愛好者たちが、なぜCDでは満足できないのかといえ、低周波域が脱落しているからだろう。それは音波ではなく、地面の鈍い振動となる。これも自分でヴァイオリンなどを演奏した体験者なら周知だろうが、弦楽器の音響に演奏者の肉体は直に共鳴し、自らの身体が振動する。演奏する感動の幾分かは、こうした楽器との一体感の実現に負っているだろう。

ここからふたつ目の教訓を導くならば、可聴域として経験主義的な実験で有効と前提されがちな領域の外に、ともすれば実験環境からは脱落しがちだが、現実には隠された作用を及ぼしている要素が潜んでいる。その可能性は排除できない、

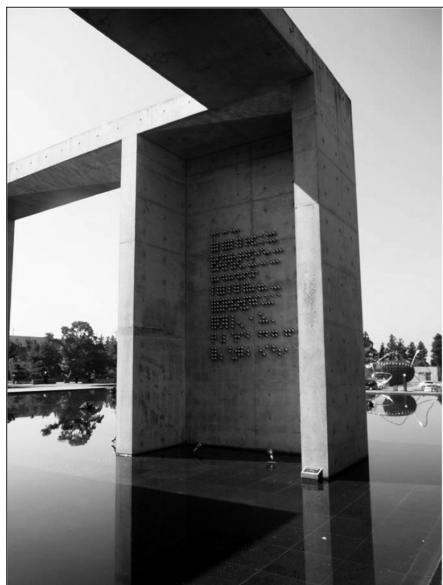


■05 Cathline Binet 《The Games of Countess Dolingen of Gratz》1981

ということだろう。可聴域の周りに非可聴域が広がっている。それと同様に、可視光線の世界の外には、紫外線の外と赤外線の内、人間の肉眼では把握できない光波が存在する。なにが実験的環境から排除されているのか。その盲点に留意することが、都合のよい数値データを獲得するよりもはるかに重要な場合は、少なくない。だが自然科学実験は、ともすればこれを見落とす。Relevance と irrelevanceは表裏一体、失敗が成功の母たる所以である。

視覚と触覚とのあいだ

ここで、二つ目の補助線として、筆者のこれも素朴な体験をひとつ付け加えておきたい。済州島に旅行したおりのことだった。済州道立近代美術館の入り口に、巨大な金属のドットが壁面に不規則に打ち付けてある■06。これは何なのか。しばらくして、ようやくそれが巨大な点字であることに気づいた。だがこの点字、いったい誰に読めるのか。盲目の人々には、それらを見ることは元より不可能。そして近寄って指で触れても、寸法が大きすぎて、点字としては読解不可能だ。反対にそれが点字と目視できた、いわゆる健常者の大半は、点字の読解能力に欠けている。そこに何が記してあるのか、読み取れない。筆者はあとでこれが済州島に生を営んだある詩人の詩句であることを教えてもらった*08。とはいえ、盲人も健常者も、どちらにとっても、この壁面作品のメッセージは、いわば読解の彼方に佇む神聖文字hieroglyphでしかない。ならばこの作品は何を訴えているのか。そこに視覚作品として示されたのは、読解可能性の否定的条件だろう。所謂健



■06 Ko Sangum After the poem by Lee Senjin, 2008 (済州島道立美術館 撮影：稲賀)

常者は、この作品を前にして、自分たちの点字読解力の欠如を悟られる。反対に盲人はそこに異常肥大した点字パネルがあることを、視覚によって知ること、また指先で触知することもできない。つまり、適切な寸法と環境媒体という2つの基礎条件を満たさない限り、視覚と触覚との交差も、文字記号の意味把握も容易に不可能になってしまう。そうした認識の閾域の限界を、この壁面作品は、雄弁とは程遠い沈黙のうちに黙示していた。

斜位と斜聴と

以上の、いたって初歩的な観察が、われわれを3つ目の補助線へと導く。Ernst Mach■07といえば、『感覚の研究』で著名な科学哲学者だが、初期には眼の生理学的研究でも顕著な業績をあげている。そのひとつには斜視strabismusの研究がある。小田部胤久氏によればライブニッツ



■07 エルンスト・マッハ (1838 - 1916)

はDescartesの斜視への愛好を記録しているというが、とかく視覚像は網膜の中心近く、正面視をした場合に、対応する眼底中央を中心に形成されるもの、と思われてきた。だがマッハは観察により、むしろ網膜の周辺部分、斜めにしか像を結ばない部分に到達する視覚刺激の重要性に着目した。意識になんらかの像が結ばれる過程では、これら周辺部に斜視によって捉えられた歪んだ映像が、いわば予兆をなし、それが前意識を形成し、脳における動的な経験像が破綻なく構成されるのを助けている――。

おおよそこのようにマッハの視覚論を理解、あるいは曲解し、それを大胆にも音声映像の現象論へと援用した人物に、日本における近代の和歌詩学および民俗学の祖のひとりとして知られる折口信夫 ■08がある。かれは20世紀初期に国学院大学に提出したその卒業論文で、マッハを援用しつつ、いわば音声論における斜視、すなわち「斜聴」の可能性を提唱した。すなわち、特定の言語にあってはひ

とつの音声を耳にした瞬間、音韻論的に次に現れる音素はある程度の可能性の範囲のなかですでに潜在的に選択されており、したがって聴取者は、まだその音が発現する直前に、いわばその来るべき音をすでに期待し、予感している。それが実際に実現されると、さらにそれらの音素の連なりから続く音素も（より狭い可能性の範囲で）想定でき、想定と現実がびたりと重なったところで、聴取者の頭脳に意味が構成されてゆく。これを言い換えたのが時枝誠記の「言語過程論」であったといっては極論だろうが、かれらの営みはFerdinand de Saussureの構造主義言語学の彫琢とも平行しており、知られるとおり、一種の競合関係にすらあった*09。

詩の朗読と運命共同体と

ここには言語の魔術的効果への洞察も胚胎Prägnanzしている。すなわち予兆される音韻が実際に登場することを共感できる人的共鳴体の構成員たちこそが、詩歌の経験を共有財産として受容する詩的運命共同体を形成する。そしてそれは、



■08 折口信夫 (1887-1953)

今は亡き先祖の残した詩的遺産を分有participerする営みを通じて、自分たち学年の違いを超えた一体性を強固に育て上げてゆく。日本の旧制高等学校の生徒が、世代を超えて共通の寮歌やゲーテの詩句を暗唱し朗誦することを糧に育んだ共同体意識も、これとなんらかの形で通底するだろう。それは近代国民国家体制が自らの統合の靱帯として頼む強力な磁場をも形成する。

そして、この磁場が放出する磁力のenergeiaを保証したのが、例えば押韻や脚韻といった詩的韻文に特有の音韻的な反復記号だった。M.HeideggerやK.Löwithとも交友をもった哲学者、九鬼周造もまた、偶然性の研究の傍ら詩歌の押韻研究に打ち込み、アリストテレス詩学に依拠しながら、押韻にこそ、隠された潜在すなわちディナーミスを現実態としてのエネルギーへと変換する鍵を見出した。韻の朗誦の反復を通じて、詩歌は今に「永劫回帰」を果たし、「過去」を「現在」に再来させ、「偶然」を「必然」へと脱皮させ、「永遠の現在」を実現してゆく。そこに九鬼はストア派のいうpalingenesiaを見るが、これはmetempsychosisすなわち「魂の再来」とも縁戚のある術語に他ならない。

神秘体験と幽霊の再来と

さらにこうした永劫回帰の体験は、自我をその小さな殻から解きほだき、永遠と一瞬だけが接触し邂逅することを許す。筆者の推定だが、これは九鬼周造が岡倉の『茶の本』の一節から、それこそ「本歌取り」よろしく受け取った教訓であったはずだ。中国の仙人・伯牙は龍門の桐の巨木からつくられた琴を演奏して、楽

器と一体となる。その忘我の境地に、岡倉は脱魂ecstasy、ないし「神がかり」ἐνθουσιασμός=「神的なるものによる憑依」を見出していた*10。小田部も指摘するように、Leibnitzもまた「現在は未来を孕む」praesens est praegnans futuriと語っていた。現在のうちにすでに未来の予兆は萌し、やがて到来=再来する。その詩的過程は、折口の「斜聴」から九鬼の押韻論へと、それこそ「永劫回帰」の回路の一部をなして、連綿と連なっていた、といって過言でない。

これは言い換えれば、過去の亡霊を呼び覚ます営みにも踵を接する。『平家物語』の琵琶法師に取材した、Lafcadio Hearnこと小泉八雲晩年の怪談、「耳なし芳一」を思い出してもよいだろう。平家の滅亡の悲話を琵琶の演奏に乗せて語る遊行者は、ときとして当の亡霊に憑依される。霊の世界への誘惑から芳一の人格Personaを救うために犠牲になったのが、般若心経による呪文を書き忘れた芳一の耳朵だったという。この話では、聴覚器官の外縁部が、正気と妄想との閾域として、境界線上の象徴的な役割を担っている*11。

ハーンをこうした詩的言語の朗誦にはつきものの魔性へと導いたのは、しかしながら同時代の科学的な認識だった。進化論で著名なCharles Darwinの甥に、優生学の祖としても知られるFrancis Galtonがいる。かれは多くの犯罪者の写真を重ね焼きして、典型的な相貌の抽出を試みた。皮肉なことにその結果現れたのは、個的な相貌の特異性を喪失した、無人称で中立な相貌、いわば「のっぺらぼう」だった。だがこのような総和の集合として、ハーンは先祖の霊を想定する誘惑を禁じえない。シンシナティー時代

にすでにその片鱗を見せるこの妄執は、日本でさまあまな口承伝承に触れるうちに、確信へと変貌を遂げる。ひとりひとりの魂のなかには、生命誕生以来の過去の無数の生物の魂たちの記憶が重層し堆積し集合している。ハーンが秋の虫の音に聴き取るのは、そうした祖霊たちの懐かしい声だった。ここにも、悲しみこそが琴線に触れるという経験主義的な立証にたいして、詩人の直観が与えた大胆な解釈のひとつを認めることができるだろう*12。

ここで、以上の観察を前提として、基調講演をなした3つの報告への質問に移りたい。

術語の地政学と時代的揺蕩い

フランク・フェーレンバッハはLeonard de Vinciの絵画論について詳細に分析した。

まず用語の解釈には、詩的言語の翻訳で上に指摘したのと同様の困難が付きまとう。これは筆者がErnest Gombrich卿とも書簡で議論した経験のある事柄だが、ある時代と文化圏に特有の術語は、どのようにしてその解釈の正統性を保証できるのか、という問題がある。Warburg Instituteでゴンブリックの次の世代に属するCharles Hopeなどが取り上げてきた論点だが、レオナルドにおけるenergiaはアリストテレスの定義として現在の研究者が前提としている概念に重なるのか。impressio (刻印) にせよ, perspectiva (視覚・遠近) あるいはvehiculum animae (魂の乗り物) さらにimaginazione (想像力) などは、どのような知的パラダイムparadigmeに立脚しており、それはそれ以外の知的世界とどのような共約性commensurabilityを持つのか否か。こ

うしたThomas Kuhn流の問題設定そのものを、ゴンブリックは全体主義への嫌悪から認めようとしなかった。だがKarl Popper流の反証理論だけでは、こうした概念史研究の文献学的方法論上の困難を乗り越えることは、原理的に不可能——。これはもう半世紀もまえに、いわゆる実証主義論争を惹起した案件である。

「一瞬に」と幽霊の次元

そのうえで、レオナルドが強調するin un subitoに注目したい。「一瞬のうちに」という表現であり、レオナルドによれば、絵画は状況を「一瞬のうちに」把握できるが、詩をはじめとする文字表現は、聴取や読解に時間を要するので、絵画より劣位にある。この強弁めいた主張の裏には、従来、文字表現が知的作業として圧倒的な優位を誇っていた文化環境にあって、肉体労働者にして職人という劣位に甘んじることの多かった画家の社会的地位向上という政治的な意図が潜んでいたことも、歴史社会学的に指摘されてきた。だがその傍らで、ここにはモデル構築にかんする、きわめて本質的な問題点が集約されている。一方に次元縮減の問題がある。絵画あるいは平面図像は現実を二次元に切り詰める。だがその論法でゆくならば、文字情報は二進法の電子記号にまで切る詰める可能性を潜在させており、最終的には一次元にまで現実を捨象する能力を秘めている。残るは処理速度の能力次第であり、その優劣は媒体の特性とは本質的には別問題だろう。

現時点の情報処理理論と電子媒体の処理能力からみれば、2次元映像に瞬時性を認めるレオナルドの論拠は、ほぼ無効となっている。とはいえ音声言語を脳内

映像へと再生するには、入力時間を無視できない。となるとここには、果たして次元の縮減がより高度な情報処理といえるのか、という、いまひとつ別種の問題が介在してくる。さらにこの「次元の縮減」は、先に検討したような有意性 *relevance* の判断による座標軸の縮減とも交錯する。平面座標軸と三次元上で垂直な方向に点在する所与は、件の平面座標上には同値の射影しか投じないから、その変化は計測データから自動的に脱落する。だがそうしたデータ計測上の盲点、あるいはそれゆえ精々「幽霊」ghostとしてしか認知されない雑音noiseを無視する合理性が、近年の情報処理理論では、理論上の盲点として、問題視されるに至っている。いささか短絡するが、脳科学関係の論文がともすれば陥る欠陥が、この盲点失認と裏腹である。これは『認識とパタン』で渡邊慧が「醜いアヒルの子の定理」として立証したことだが、座標軸の選択に価値論的な中立性は保証できず、そこからは恣意性が原理的に排除できない。厳密な自然科学的認識も、この原理的な限界から自由ではありえない。否むしろ、ここに現今の自然科学実験の方法的ジレンマが露呈している。

情報圧縮と「詩的骨折」と

さて情報圧縮についてのレオナルドの見解を批判的に検討してきた。皮肉にもドイツ語では詩 *Dichtung* は圧縮 *Verdichtung* の成果である。次元の縮減の模範のひとつが、ほかならぬ詩的表現だったはず。先に論じた諺も、同様の圧縮効果の成果にほかなるまい。ホラティウスに淵源を発するレッシングの「詩は絵の如く」は今ここでは省略するが、たしかに映像は

「瞬時」に直観的な把握を許す。だが巨大な70mm映画の画面では、その細部のすべてで何が発生しているのかを「瞬時」に把握することなど、無理である。それをきちんと数え上げるには、結局、言語化という方法に頼るほかなく、これには膨大な時間の投資が避け難い。Bronzinoの一枚の判じ絵を読み解くのに、Ervin Panofskyがどれだけの紙幅と文字数を要したか、思い半ばに過ぎる、というものだろう。映像に結晶化されたものを、文章へと「解凍」する作業にもまた、時間的遅延が不可避となる。

そのうえで、日本の和歌は31音節、俳句となれば17音節しかない。レオナルドには詩とは長いもの、ソネットですら、といった文化拘束的な常識が前提となっていたが、日本ではまるで違う。また漢詩の場合も、表意文字の空間的な把握は、表音文字だと通常思われているアルファベットなどの記号体系とは、読解の認知的行為過程が根本的に異なる。これらを一緒にした一般理論構築に限界があるのは、あまりに明らかだ。

「落花枝に戻るとみれば胡蝶かな」この荒木田守武の警句を初期の日本学者 Carl Florenz は理屈でもって脚韻のあるドイツ語の詩に長々と翻訳・展開した。これには上田万年が、これでは瞬時の筈の詩的感興が台無しだと貶して論争となったことが知られている。K.フロレンツは反論して日本の詩は短か過ぎるから世界文学 *Weltliteratur* に仲間入りできぬのだ、と憎まれ口を効いている。これはだが、単なる長短の問題ではない。原詩には、認識論上の破綻、breakが仕込まれている。一般には「切れ字」などとして定式化される手法だが、花と見えたもの

が突然に胡蝶へと変身を遂げる転機、変態の意外性が、この句の骨法をなす。認識論上ないし視覚上の錯視の発覚が短詩型のうちに圧縮されている。逆にこれを一枚の静止画像で示すのは、容易ではなからう。かえって静止画像では把握し難い、In un subito瞬時の変貌である。脳の認知機能において配線Verschaltungが突然変更を蒙る瞬間だが、はたしてこれをレオナルドのいうprontitudine（即応性）の理念で捉えることはできるのか。そして短い詩句のうちに仕込まれたこの意味論的な「骨折」fractureこそ、世界の一瞬の破碎・劈開であり、岡倉が『茶の本』で説く自我喪失の瞬間, ἐνθουσιασμός「神的なるものによる憑依」の契機をなす詠的結構の謂だった。

アリストテレスの謂う「形相の押し型」とはσημεῖονつまり元来は刻印による標章であり、記号の語源をなす一方、ストア派は刻印typosisを語るが、こちらは活版印刷の字母typographyの語源として現在に至る。Typologyとは新約神学ではイエスの事績が旧約の預言の成就であるとする予兆論をも意味する。ここにはともにAbi Warburgらが記憶痕跡EngrammaあるいはEnergiekonserveつまり「エネルギーを保存する器」と呼ぶものと踵を接する観念が澎湃している。G. Didi-Hubermanの刻印論Empreinteにも通じるが、「器」に「移」された記憶がいかに漂流し変態Verwandlungを遂げるか、そこに記号の輪廻転生Transmigrationや刻印の生々流転 Ταπávταπειの実相を探ること。それこそレオナルド自然学がわれわれに問いかけ、現在まで残しておいた課題のひとつだったのではあるまいか。

微小表象と相転換と

In un subitoの変態, prontitudineの瞬間——。この話題が「微小表象」とその認識の閾域へと導く。小田部胤久は「微小表象」をめぐる18世紀の美的省察にきわめて明晰な見通しを与えた。専門的な美学学説史上の議論からは離れ、ここでは筆者の関心に引き付けた質問に限定したい。まず、ライプニッツがinfiniment petit「無限小」についての考察で微分法への関心を表明する一方、灌や水車の傍らに住むと、意識の閾域が変動するのに応じて、水音がいつしか意識から消滅する現象に着目していること、に注目したい。Baumgartenもライプニッツの極小に関する議論を受け、壁に無数の鏡がかかっており、それらが互いに相映相照する拡散の様子を記述している。一方で灌の流れは「ゆく川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず」（鴨長明『方丈記』）であって、そこには一瞬ごとに永遠の現在が反復される。他方で無数の鏡に映る光の相互乱反射は、帝釈天の宝綱として知られる比喩を思いおこさせる。どちらも華嚴教学で基礎をなす譬え話だが、ライプニッツやバウムガルテンは、なお仏典などには接していなかったはず。微分積分にかんしては、中国の易経や八卦がライプニッツの発想源となったことは広く知られる*13。こうした東西の知的相互映発は、文献学的な学術手段の操作限界を超えてそれらの総合を目指すような、未知の仮説演繹への誘惑に身を委ねるべき研究課題たりうるのか。

生氣論・心靈学・心理学

他方、ライプニッツは心理学に相当する語彙に、psychologieではなく、

pneumatiqueを用いている。これらの語源的な関連は、さらなる探究への誘いとなる。ギリシア語のPsycheがラテン語ではanimaに置換され、これは生氣論animismに痕跡をとどめる。なぜそれが今日言う「心理学」へと遷移し得たのか。両者の懸隔をわれわれはどう扱うべきか。これはレオナルドについて呈した疑問にも重なる。他方、pneumatiqueはギリシア語のpneumaに由来し、呼吸や息吹を意味するが、これはラテン語ではspiritusに置き換えられ、現代語のrespiration, aspiration, inspirationなどにも残り、呼吸が靈感といった不可視の着想の源と結びつく概念だったことを想起させる。さらにキリスト教の文脈では、ヘブライ語のruahから派生したギリシア語訳の「聖なる呼吸」ΑγιοΠνεύμαに由来する「聖なるプネウマ」つまり「精霊」が、ラテン語経由で英語のholly spiritへと変貌を遂げるが、これはゲルマン語圏ではder heilige Geistであり、Geistは英語のghostと語源を共有する。先にラフカディオ・ハーンの妄想に触れたが、かれが異郷の日本で発見した霊性や怪談に現れる幽霊などが、こうした語彙論的な漂流や流転あるいは変態MetamorphoseのSpielのうえに育った思弁だったことも、見過ごせまい。魂Seele, soul, âmeは人間にしか存在しないとするのが、正統キリスト教の教義だとすれば、そうではない霊には「幽霊」ghostと呼ばれる「位格」Persona (?) を当てるよりほかにない、ということになるのだから。

カントの美学理論とその解釈については、カントが立脚しつつも脱却しようとしたparadigmeの側から見るか、それともカント自身が確立したと後世が認知し

たparadigmeにそってカントのテキストを解釈するかで、護教論や、学派・学説史の対立も絡まり、文献学的な操作は不必要なまでに面倒なことになる。3つの批判書でもカントの立場は動き、なにを人間学と見るか、ästhetischも美的か感性(論)的か、文脈によって異なる。さらにそれらの語彙を今日公認の哲学史あるいは美学思想史という枠組みの内側だけで再構成するので十分なのか否かも、いうまでもなく厄介な問題を惹起する。文献学的な体裁をとった議論が、その厳密さゆえに、かえってカントに胚胎していた潜在可能性の更なる開発にとって足枷となる危険は、逸脱した解釈の横行を制御すべき学会事情とも裏腹に絡まり、再び先に論じたparadigme論の是非へと回帰して、循環論法に陥りかねない。

そのうえで、論文の末尾で小田部が引用したA. W. Schlegelの見解は、「心理学」をいかに定義するかという、先述の語彙論・概念史的な錯綜を前提としたうえで、なお現在の「経験美学」empirische Ästhetikの位置を探るうえで、看過できない問いとして残る。曰く「経験的心理学という、今ではほとんど死に絶えた学問は、(中略)そもそも理に合わない企てである。人々は魂の実験物理学eine Experimentalphysik der Seeleを打ち立てようとしたのである」*14と。ここには小田部氏のメニングハウス氏に対する意図的な挑発と挑戦さえ透視されるが、それへの現時点での返答は、Winfried Menninghaus本人に委ねたい。

幽霊の復権にむけて

メニングハウス氏の講演に対する筆者の質問は、以上の論述からすでに明らか

だろう。それを最後に手短に要約しておきたい。第1に、phantom of lyrical melodyの残存は、果たしてEmpirical aestheticsの敵なのだろうか。むしろいままでの経験論的な実験装置がphantomとしてしか捉え得なかった亡霊こそ、経験美学の突き留めるべき謎の核心ではないか。亡霊は、視覚と聴覚との閾域の谷間、可視・可聴域の背後や彼方に残る闇、あるいは伝統による反復と輪廻転生のうちに胚胎Prägnenzを遂げる。耳なし芳一に憑依した「幽霊」は、憑依現象や幽体遊離、幻視、幻覚の生理学的発生機構の一環として、脳科学が探るべき対象でもあるが、それは詩的表象におけるpitch recurrenceとacross stanzas correlated significantly with listeners' melodiousness ratingsと感応することで、quantitative measureによって計測することを許すような媒介変数であるはずだからだ*15。

第2に、こうしたmeasurable and quantifiableなphantomたちは、記憶のなかの残像として残響し、Nachdruckの刻印を残し、あるいはNachlebenすなわち死後の生を通して、詩の読者に憑依する。それを受け入れる「運搬の器」の性質を見極めることが、観念論美学の彼方で、あらたな課題として立ち上がるのではないか。Tolstoyは『戦争と平和』の一節で、歌の意味全体は語彙のうちにあり、メロディーは自ずと到来してそれらの語彙を繋ぐだけだと述懐している。この機構について、まだ実験的な裏付けは得られたとは言えまい。とはいえ、筆者の短いコメントのなかでも、そうした探索への手掛りとなる事例は幾つか指摘した所存である。メイニングハウスは冒頭に挙げた論文の結論部で「詩的発声メロ

ディーへの知覚的感受性」perceptive sensitivity to poetic speech melodyは「詩に繰り返し露出されることからのみ獲得されるものとは考え難い」unlikely to be exclusively acquired through repetitive exposure to poetryとの結論を引き出している。それはそれでよからうが、なにもそのことは「くり返しへの露出」が無意味なことを意味してはいまい。

神秘的宗教体験の経験主義的分析へ？

実際、言葉による宗教的な典礼spoken religious liturgyなどへのさらなる探究では、以上のコメントで指摘したように、師匠から弟子への世代間の伝達技法をも含む、多様かつ複雑で、集団的な実践、雑音noiseや亡霊phantomたちの跳梁している厄介な複合時空間への反復的な露出を相手にするほかない。これはおよそ周囲から孤絶した理想的な純粋実験環境からはほど遠い。稽古の過程に不可避なこの複雑系の実態も、ここに指摘した幾つかの補助線から、ゆくりなく確認できたのではないか。経験科学的手法による詩的言語の解明は、現在の実験手法の弱点を直視しながら、その方法論的臨界を超える不断の吟味を要請する。田中純氏がそれを警戒する「研究者の管理職的テクノクラート化」、あるいは伊藤秀一氏がその**遍在傾向に危機**を表明する「美の支配」――の兆候に抗して、有効なる手立てを発案するためにも、ゆめゆめ雑音を無碍に排除したり、幽霊を闇雲に捨て去って、ひたすら美の光明と力の功名とばかりを目指したりしてはなるまい――。大宮勘一郎氏も説くように、学術が「育みと養護」Pflegen und Hegen

を取り返し不能な有様で喪失しようとして
いる荒廢の世相に、われらは生きてい

るのだから*16。

東京大学駒場キャンパスにて、2019年5月18-19日*

【注】

*01 「神経系人文学と経験美学」 *Neuronale Geisteswissenschaft und empirische Ästhetik* フンボルト・コレーク
東京2019, 東京大学駒場キャンパス, 2019年5月18-19日, より。

*02 Winfried Menninghaus et al, "The Distancing -Embracing model of the enjoyment of negative emotions in art perception," *Behavioral and Brain Science*, 2017, pp.1-63; "Poetic speech melody: A crucial link between music and language," *PLOS/one*, <https://doi.org/10.371/journal.pone.0205980>, Nov. 2018, pp.1-21ほか。

*03 稲賀繁美 (編)『映しと移ろい: 文化伝播の器と蝕変の実相』花鳥社, 近刊予定, 掲載の拙稿参照。

*04 古田亮 (監修)『別冊太陽『岡倉天心』』平凡社, 209号, 2013年, 所収の拙稿参照, 14-15頁。

*05 Shigemi Inaga, "Fracturing the translation or Translating the fractures? Questions in the Western Reception of Non-linear narratives in Japanese Arts and Poetics," *Comparative Critical Studies*, 2013, pp.39-56, esp. pp.46-47.

*06 稲賀繁美「非母語という疑似餌には何が掛かるか」郭南燕 (編)『バイリンガルな日本語文学』三元社, 2013年, 22-46頁, とりわけ38頁。

*07 稲賀繁美「『うつしみ』と『いつくしみ』: 文化継承と再編への軌跡 戦後七十年と自然の営み」『神園』第16号 明治神宮国際神道文化研究所 2016年11月3日 3-18頁

*08 稲賀繁美「全球的な知覚から近代性を問い直す: モダニティを振り返って再定義し, デジタル化されたグローバル尺度モデルを修正する」『第2日: 登壇者によるパネルディスカッション』『美術館はいかにグローバルになれるのか? How Global Can Museums Be?』CIMAM (国際美術館会議) 年次総会東京大会実行委員会 (事務局: 森美術館) 2016年3月25日 90-107頁, 145-166頁; 「超越 覺文化的觸覺感知: 重新定義博物館學中的數位化的全球尺度模型 Haptic Sensations Beyond Visual Culture: 再defining "Modernity" in Museology so as to Readjust the Digitized Global Scale Model」『現代美術 MODERN ART』北雙特刊 TAIPEI BIENNAL 2016 第183号 中華民國105年 季刊・12月出版 臺北市立美術館発行 2016年12月 62-75頁

*09 松浦寿輝『増補・折口信夫論』ちくま学芸文庫版, 2008, 23-29頁。安藤礼二『神々の闘争: 折口信夫』講談社, 2014, 第2章。

*10 Shigemi Inaga, "Kuki Shūzō and the Idea of Metempsychosis: Recontextualizing Kuki's Lecture on Time in the Intellectual Milieu Between the Two World Wars", *Japan Review*, No.31, International Research Center for Japanese Studies, 2017, pp.105-122.

*11 稲賀繁美「もの・こと・かお: 霊性の憑依と転生をめぐる」『比較文明』第32号 2016年11月 4-19頁

*12 稲賀繁美「「私」と「わたし」が出会うとき: あるいは双子の幽霊・輪廻転生説と複数字宙論から」『国立国際美術館ニュース』214号 国立国際美術館 2016年6月1日 2-3頁

*13 長尾龍一「ライブニッツと中国」(36-98頁)や「グロティウスとアジア」ほかスピノザ論を含む『西洋思想家のアジア』信山社, 1998年, 雄大な体裁に卓越した議論が高密度で詰まった恐るべき著作である。

*14 A.W. Schlegel, *Kritische Ausgabe der Vorlesungen*, Paderborn, 1989, I, SS.218-9; 小田部論文に引用。

*15 Cf. W. Menninghaus, *Schwellenkunde, Walter Benjamins Passage des Mythos*, Suhrkamp Verlag, 1986, 伊藤秀一訳『数居学 ベンヤミンの神話のパスサージュ』現代思潮社, 2000年の第8章には「神話的なものの時間形式, 永劫回帰」がある。本コメントもそれを前提としたものであるが, この論点に関するメニングハウスとの議論には, 場所を改める必要がある。稲賀の主要な論点は和文では『接触造形論』(名古屋大学出版会, 2016) 第1部第5章, 第2部第1章ほかにその素描がなされていることを, お断りする。

*16 出典明記のない引用は, 会議当日の配布資料より孫引き。この場を借りて, 坂本泰宏, 田中純ほか主催者各位に謝意を表す。なお本稿では, コメントとしての性質からして, 根拠となる拙稿を中心に簡略に注記するにとどめたことをお断りする。また本稿の会議コメントで扱った問題については, 坂本康宏・田中純・竹峰義和 (編)

『イメージ学の現在 ヴァールブルクから神経系イメージ学へ』東京大学出版会, 2019年および, そのもととなった論文数編に加えて, 扱う外国人著者の紹介と解題とを収めた『思想』2016年4月号を参照されたい。「研究者の管理職的テクノクラート化」(田中純), 「美の支配」(伊藤秀一) はともに同誌解題より。なお「美の支配」は, メニングハウス『美の約束』(原著2003, 和訳2013) 第5章末尾で論じられている。